2022年度

2/1　入学試験
国　語

注 意

1．試験開始の合図があるまで，この冊子の中を見てはいけません。
2．放送の指示にしたがって，解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり，受験番号・氏名を記入します。
3．試験時間は45分です。
4．問題は，1ページから15ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認（かくにん）し，足りないページがあったら申し出てください。
5．答えはすべて解答用紙に記入してください。
6．試験が終わった後，問題冊子・解答用紙とも回収します。
7．記述問題では，指定された字数の8割以上は書いてください。ぬき出し問題では，指定された字数で答えてください。どちらの場合も，句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

1 次の1～8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 ジュンシンな気持ちで創作にうちこむ。

2 交通事故をコンゼツするために、安全講習を行う。

3 犯人のショウタイは、本の最後にわかる。

4 かり取ったイネタバを、しばらく日に干す。

5 家にキュウキュウ箱を常備している。

6 高飛車な態度をとって、人にきらわれる。

7 適度な温度で、発芽すると考えられる。

8 動物の生命を尊ぶ考え方に賛同する。

2 次の1～5のことわざと似た意味のものを、後のア～カの中から一つずつ選び、答えなさい。ただし、記号はそれぞれ一度しか選べません。

1 浅い川も深く渡れ

2 郷に入っては郷に従え

3 棚からぼた餅

4 花より団子

5 井の中の蛙大海を知らず

ア 名を捨てて実を取る

イ 念には念を入れよ

ウ 葦の髄から天井をのぞく

エ 門に入らば笠を脱げ

オ 鴨が葱を背負ってくる

カ 河童の川流れ

3 次の詩を読み、下の問いに答えなさい。

落ち葉の道

さわだ　さちこ

落ち葉のつもった　道をあるいている
落ち葉の　一枚一枚は
しかられて　ないたこと　だったり
とおくへいった　だれかのこと　だったり

ときどき　たちどまって
①落ち葉を一枚　ひろいあげてみる
うれしかったことも
さみしかったことも
みんな今は　［　②　］の色をしている

1 ――線①「落ち葉を一枚　ひろいあげてみる」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　葉一枚一枚の美しさを味わうということ
イ　秋の深まっていく様子を楽しむということ
ウ　自分自身の今を見つめ直してみるということ
エ　時の流れのはやさをかみしめるということ
オ　過去をなつかしく振り返るということ

2 ［　②　］に入ることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　雨　　イ　朝日　　ウ　雲　　エ　夕焼け　　オ　影

3 ――線③「落ち葉がふえていくのは　いい」とありますが、なぜですか。その理由を説明したものとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　経験や感情が積み重ねられていき、人生が味わい深くなるから
イ　美しい思い出が多く積もることで、自分の成長を感じるから
ウ　大切な時を重ねていけば、世界がより美しくなるから
エ　葉がくさり、土の栄養となることが、木々には必要なことだから
オ　落ち葉の一枚一枚は、木々が懸命に生きた印であるから

③落ち葉がふえていくのは　いい
土がゆたかになるから　いい

だれもしらない
わたしのなかの　落ち葉の道

（『ねこたちの夜』河出書房新社　による）

4　最後の連についての説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　ひらがなを多く使うことで、「道」を歩む作者の幼さを強調している。
イ　韻を踏むことで、「道」がだんだんとできあがる過程の楽しさを表現している。
ウ　体言止めを用いて、読み手それぞれの「落ち葉の道」を想像できる余白を残している。
エ　倒置法により、「落ち葉の道」という言葉のひびきの美しさを目立たせている。
オ　反復法を最後だけ使わないことで、詩の終わりだけではなく、「道」の終わりをも連想させている。

5　この詩における「落ち葉」の例として**ふさわしくないもの**を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　試合に負けて涙を流したこと
イ　どんな困難の中でも希望を忘れないこと
ウ　勉強せずに後悔したこと
エ　雨を見て、言いようのない悲しさを覚えたこと
オ　友だちとくだらない話で盛り上がったこと

4 **次の文章を読み、後の問いに答えなさい。**

自宅の最寄り駅から地下鉄に乗り込むと、電車の座席は微妙な空き具合であった。

寒い時期ということもあり、着膨れた乗客がみんな左右に余裕を取って座っている。結果、混んではいないが、①座るには勇気のいる車両になっていた。

やむを得ず、ドアの脇で立ちん坊を決め込んだ。帰宅で混み合う時間帯には、まだまだ早い午後2時頃の（注1）有楽町線のことである。

ふと目の先に、ランドセルを背負ったまま本に夢中になって座っている小さな小学生がいるのに気が付いた。背格好からして、まだまだ低学年だということが分かった。絵本ではなく、字のやや多い本を読んでいるように見えたので、小学校の二年生くらいであろうか。半ズボン姿のその小さな男の子は、自分が座っている席の左側に、紺色の上履き袋や工作で作ったような紙の箱を投げ出している。本に熱中するあまり、［　②　］ことも忘れているのである。

③私は、その子の前に立った。すると目の前に立たれたことに気が付いたその子は、私の方をじっと見上げた。そしてめんどくさそうに荷物を自分の膝の上におもむろに置いた。

『電車の中で、他のお客さんの迷惑になるようなことは駄目だよ』

そんな目だけの会話が、どうやら通じたようだった。

私が腰掛けると、その小学生は、もうすでに本に戻っていた。一心不乱に図書館のシールが貼ってある（注2）ハードカバーに顔を埋めていた。他の乗客のほとんどがスマートフォンに指を置き、小刻みに滑らせているのに対して、なぜか、その姿は好感が持てた。荷物を投げ出すような公共マナーに反した行為を差し引いても、④おつりが来るほどだったのである。

何を読んでいるだろうと好奇心がむくむくと湧いたが、残念ながら角度的に表紙のタイトルを読むのは無理であった。その熱中度から、探偵ものとかではないかと推測した。

私はタイトルの探索は諦め、自分の手帳を鞄から取りだし、その日のそれからの予定を確認することにした。

2、3駅が過ぎ、手帳をしまって隣を見ると、⑤相変わらずその半ズボンは本をにらめつけるように読んでいる。そして時折、ページをめくり、しばらくすると、また次のページをめくっていた。その様子を見るともなくぼんやり見ていると、ある瞬間、あるペー

ジのある行で目が止まったように思えた。
それまでゆっくりと顔を回転させ行を追っていたのが、ぴたりと動かなくなったのである。当然ページめくりの手も動かない。じっと同じ行を読み返しているように思えた。
すると突然、今度は、ページを今まで読んできた方に向かって、勢いよく逆にめくりだしたのである。一体何が起こったのだ。逆に戻りながら、時々、手を止め拾い読みしたかと思うと、また勢いよくめくりだす。何かを探している、何かを探しているのだ、私にはそう思えた。
そして遂に、ある箇所を探り当てると、じいっと読み出した。緊迫が隣の私にも伝わってきた。そして、それまで何も発していなかったその小学生が一言つぶやいた。
「たしかに……」

⑥私は、吹き出しそうになった。
何が「たしかに」なんだよ⁉ 何を納得したんだよ、君は⁉ そこまで入り込んでるわけ⁉
想像するに、最初にぴたっと止まったページには、彼が驚くような出来事が書いてあったのであろう。例えば、物語の主人公が、見事な推理をしてある問題を解決した、とか。そして、その小学生は、その推理の元となった（注3）叙述を再確認するために、数十ページ前まで慌てて遡ったのである。そして、あらためて読み直すと、そこにはある事実が隠れていたのを発見したのだった。そこで思わず、彼の口から、「たしかに……」。
そして私は、この小さな小学生に、およそ似つかわしくない「たしかに」という言葉遣いに思わず吹き出しそうになった……。
私は、ますます、その本のタイトルを知りたくなった。大人気ないが、私もその本を読んで、その箇所で「たしかに……」ってなりたくなったのである。
急に、その子が立ち上がった。降りる駅が来たのである。私の目は必死に、閉じつつあるその本を追い続けた。ここで逃すとそのチャンスは永遠にない。一瞬、タイトルの一部が見えた。かろうじて一部が見えたのである。そこには『ドリトル先生なんとかかんとか』と書かれていたのだった。
数日後、私は事務所の近くの図書館の児童文学の棚の前にいた。もちろん、あの小学生の持っていた本を見つけに来たのである。

あの小学生のように「たしかに……」ってなりたくて来たのである。でも、困ってしまった。『ドリトル先生なんとかかんとか』は、数えてみたら12冊もあったのである。

試しにその中から『ドリトル先生月から帰る』というタイトルを手にした。しかし、目次を見ただけでは、この本のどこで手がぴたっと止まり、どこであの「たしかに……」が生まれるのか、皆目見当がつかない。

『ドリトル先生と秘密の湖』という「たしかに……」が生まれそうなタイトルも開けてみた。しかし、拾い読みでは分かりようがなかった。

私は12冊を前に途方に暮れた。

「たしかに……」は一朝一夕では手に入りそうもないのである。

やはり、最初の1行から（注4）紐解かないと無理なのであろうか。紐を必死で手繰るように読み進んだあかつきの、あの『たしかに……』なのであろう。

そして、その「たしかに……」という境地が安直に得られないということが分かった私は、同時に、⑦自分の中に、ある感情が横たわっていたことに気付いてしまった。

いや、薄々感じてはいたのだが、正直言うと、気付きたくはなかったのかもしれない。そして、この「たしかに……」さえ手に入れれば、それは知らなかったものとして済ませられるのではないかという妙な期待もあった。

では、その知りたくなかったという感情とはどういうものであろうか。

私は、ドリトル先生の本が特定できなかった時、まず、自分の態度に「たしかに……」を（注5）享受する資格がないことを思い知らされた。

それは熱中の賜であったのである。

それだけを見つけて楽しもうなんて虫のいい話である。そしてその時、私は、あの小学生に軽い嫉妬のようなものを覚えていたのにも気付いたのであった。嫉妬と言う言葉が激しすぎるとしたら、羨ましい気持ちと言ってもいいかもしれない。

では、その羨ましさとは何か。そして、それはどこから来ているのか。

私は、あの日、地下鉄に乗った時、いつものように移動時間を有効に使おうと、座るやいなや手帳を開いて今日の予定を確認した。そこには、いつものように出席すべき会議が列挙されていた。その確認作業が終われば、コンピュータを開いて、来ているメー

ルを確かめるつもりであった。返事を求めるメールがたくさん来ているはずだ。そして、一本でも出せば、義務は減る。私は忙しい、私の時間は埋め尽くされている。そんな時、聞こえてきたのだった、あの言葉が――――。

「たしかに……」

人間にとって、時間は自由にならない。時間は誰に対しても平等に過ぎていく。

だからこそ、時間を無駄にせず、有効に使わなくてはならない。私が電車での移動時間に手帳を開いたのも、コンピュータを開こうとしていたのも、そのためである。しかし、その時、隣に熱中がいたのである。その小さな熱中は流れゆく時間も存在している空間もなく、ただただ熱中していた。時間は誰に対しても平等に過ぎてはいなかったのである。

私は、その小学生に羨ましさを感じてしまった。その羨ましさとはどこに向かったものだったのか。小学生がふんだんに持っている時間に対してか、それとも、あの熱中の仕方にか。

答えは分かっている。しかも、その気持ちが、あの電車で半ズボン姿の小学生の隣に座った時から始まっていたことも分かっているのである。

（佐藤雅彦『ベンチの足』暮しの手帖社　による）

注1　有楽町線　＝　埼玉県和光市から東京都江東区までを結ぶ地下鉄の路線
注2　ハードカバー　＝　表紙のかたい、重くて厚い本のこと
注3　叙述　＝　順をおって書き記されたものごと
注4　紐解かない　＝　本を開いて読んだり調べたりしない
注5　享受　＝　味わい楽しむこと、受け入れて自分のものとすること

1　――線①「座るには勇気のいる車両になっていた」とありますが、これはなぜですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　混み合う時間帯の車内で、無理やり座るような行為はつつしむべきと考えたから
イ　寒い時期でもあり、立っていた方が体を温めることができると考えたから
ウ　立っていた方が、目の先の小学生を観察するのに都合がよかったから
エ　両隣（りょうどなり）に座る乗客の間に図太く体を割りこませねばならなかったから
オ　健康な自分が座るよりも、他の人に席をゆずった方がいいと思ったから

2　［　②　］にあてはまる言葉としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　お店を広げている　　イ　大やけどをしている　　ウ　おざなりにしている　　エ　おしつおされつである　　オ　大きな顔をしている

3　――線③「私は、その子の前に立った。」とありますが、筆者は何をするために、「その子の前に立った」のですか。その理由を次の（　　）にあてはまるかたちにして、四十字以内で書きなさい。

荷物を隣の席に投げ出すような、（　　）ため

（下書き用）

荷物を隣の席に投げ出すような、

ため

32

4　――線④「おつりが来るほどだったのである」とありますが、筆者がそう感じているのはなぜですか、その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　スマートフォンに夢中になる人ばかりの昨今、本の世界に没頭できるような子どもだったから
イ　周りのことに気をしっかりと配り、その場にふさわしい態度をとることができるような子どもだったから
ウ　探偵もののような娯楽作品を読むのではなく、児童文学の名作を読破しようとするような子どもだったから
エ　何か邪魔が入っても気持ちが途切れることなく、すぐに集中力を取り戻せるような子どもだったから
オ　自分のしてしまった失敗の分をしっかり取り返そうと、真面目に行動するような子どもだったから

5　――線⑤「相変わらずその半ズボンは本をにらめつけるように読んでいる」とありますが、ここでの「半ズボン」と同じような使い方をしている言葉が文章中に見られます。その言葉を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　緊迫　　イ　拾い読み　　ウ　安直　　エ　ドリトル先生　　オ　熱中

6　――線⑥「私は、吹き出しそうになった。」とありますが、それはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　突然ページを逆に戻りながらめくる様子がおもしろかったから
イ　こんな小さな子にわかることなんてたいしたことであるわけがないと思ったから
ウ　小さな小学生が使いこなしそうもない言葉を発したから
エ　子どもが何に驚いているのかは想像することしかできなかったから
オ　最近の子にしては珍しく、通学中真剣に本を読む姿に感心してしまったから

7　――線⑦「自分の中に、ある感情が横たわっていたことに気付いてしまった」とありますが、それはどのような感情ですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　本を一から読んでいるわけではないのに、答えだけを求めようとする大人のずるさが染み込んでしまっていることへのうしろめたさ
イ　時間も周りのことも気にせず、本の世界に夢中になれるような感覚を自分は取り戻すことができないかもしれないというさびしさ
ウ　義務を減らすことに追われ、一日のほとんどを忙しく過ごして、何かをすることばかり考えてしまっている自分へのむなしさ
エ　知りたいことを最後まで探求することができず、早々にあきらめてしまいがちになっている自分へのいらだち
オ　知りたくてもなかなか真相にたどり着くことのできないもどかしさと、答えが見つかりそうもないことへのあきらめ

5 **次の文章を読み、後の問いに答えなさい。**

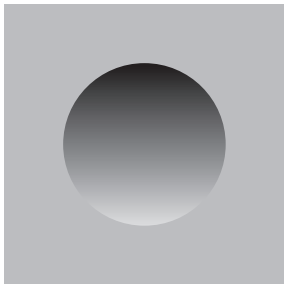
1 僕らはときに、「思ってたんと違う」と感じる現象に出くわすことがある。脳みそのいたずらというやつだ。（注1）錯視はそのひとつ。目に映ったものを脳が処理する際に、現実をゆがめて理解してしまう。これは、生物としてはそれなりに意味があるもの。たとえば下の図。同じ図を上下反転して貼り付けただけなんだけど、①左側は出っ張っているように、右側はくぼんでいるように見えるだろう。

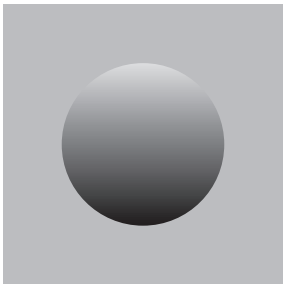
2 人間の脳がこう解釈するのには理由があって、自然環境ではふつう、光は上から差してくる。すると、光のあたり方と影のでき方を脳で処理することで、その物体が出っ張っているのか、くぼんでいるのかを推定することが可能になる。そのような三次元構造を推定できれば、物体までの距離の把握なども可能になり、なにかと人間の役に立つ。これが、脳がこのようなおせっかいな解釈をする理由である。

3 脳みそのおせっかいな解釈は、たいていの場合、僕ら人間の役に立つようにできている。もし人間にとって（注2）デメリットの多い解釈ならば、それは進化の過程で（注3）淘汰されて消えているはずだから。しかし脳のはたらきはいつでも万能というわけではない。メリットとデメリットの両方があり、前者が後者を上回っているというだけのこと。デメリットが存在することもまた事実なのだ。

4 たとえば僕ら人間は、②なんでも擬人化してしまう傾向を持っている。たとえば自動車。街を走っているすべての車に、何らかの顔があるように思えてしまう。単に顔があるというだけではない。かっこいい・いかつい・かわいい・おもしろいみたいに、その車を擬人化して、人間が持つ属性を付与してしまうのである。そして車のデザイナーも、人間が車を「顔」と見なすことを理解したうえで、与えてやりたいキャラクターを設定しているのである。

5 ちなみに、自動車は「二つ目」なので擬人化がたやすいが、バイクは「一つ目」のことが多いので、顔を感じてしまうことは少ないように思われる。なぜ人間は、［　③　］。原始時代、相手が獲物であるシカだとしたら、草むらのなかでシカの顔を認識することは、原始人にとってメリットがあるはずだ。逆に、相手が僕らを捕食しようとしているトラだったら、密林のなかで相手に気づくことで命が助かることもあっただろう。野生動物だけじゃなく、抗争している隣の部族の戦士だったら？やはり相手の顔を認識することは重要だ。さらには、相手の表情を読み取ることも大事になる。こちらを威嚇しているのか、それとも好意を示しているのか。それを的確に推定できるのは、人間にとってプラスになる。





6 そんなわけで、人間は顔にすごく敏感だ。顔を敏感に意識するという人間の性質にはメリットが多いが、その副作用として、顔じゃないものを顔と思ってしまう。これを疑陽性という。目で見たものに脳みそがだまされているというわけだ。

7 自然物が人間的な人格を持つように感じてしまうのも疑陽性の一種といえるだろう。たとえば、動物の擬人化は、古くは（注4）鳥獣戯画の時代から存在する。さらには、特に日本人は、自然物である岩とか樹木とか、山とか川とかを人格があるものと見なし、彼らのご機嫌を取るための儀式を行なってきた。

8 これこそが宗教の原形である（注5）アニミズムだ。災害が発生すると神さまが怒ったのではないかと考え、なだめるために儀式を執り行ったりする。このように、④超自然の存在を介した因果関係を想像してしまうのも人間の特徴である。

9 本来、自然災害の発生に対して人間は無力なのだが、なんらかのはたらきかけでそれを回避できると思ってしまうのだ。それには、人間とコミュニケーション可能な人格的存在が自然災害をもたらしているという前提が必要になる。これもやはり自然の擬人化という疑陽性の一例だと思う。

10 ちなみに、現象になんらかの因果性を求めてしまうのは、別に人間だけにかぎらない。たとえばハトも、宗教っぽいものをかたちづくってしまったという研究例があるそうだ。

11 ハトが入った鳥カゴにボタンを設置し、電子回路を接続する。ボタンが押されたとき、（注6）ランダムに一定の確率でエサが出てくるように設定する。ハトがボタンを押したとき、あるときはエサが出てきて、あるときは出てこない。実際のところエサが出てくる確率は完全ランダムであり、ハトが操作できるものではないのだが、ハトは自分の行動と何らかの因果を持っていると思うらしい。ボタンを押す際に、羽をバタバタさせるなどの「儀式」を執り行うようになったとのことだ。

12 たまたま羽をバタバタさせたときにエサが出てきたことがあった。その後試しにやってみたら、偶然またエサが出てきた。そんなことが2〜3回続くだけで、ハトは何らかの法則性を見いだしてしまうらしい。でも実際は、ハトの羽ばたきには何の意味もない。しかし哀れなハトは、何度か羽ばたきながら押してもエサが出てこないときは、羽ばたきが足りないとばかりに、いっそう強く羽ばたいてみせるらしいのである。

13 これは笑い話ではない。実際には存在しない因果に（注7）翻弄される人間が多いのも事実である。「神さまにお願いしたら願いがかなう」という因果関係を信じて、神社に参拝する人は多い。しかし当然、願いがかなわないこともある。そんなとき、自分の信仰が足りなかったのではないかとばかりに、なお一層熱烈に祈り、またお布施を増額したりする。それはもしかしたら、ハトと同じ行動をとっているのかもしれない。日本各地に残る（注8）お百度参りなどの風習は、それを（注9）如実に表しているよう

に思えてしまう。

14 僕は宗教を批判しているわけでなく、宗教心を否定しているわけでもない。ただ、おせっかいな脳みそは宗教を生んでしまうということを伝えたいだけである。ちなみに高名な生物学者のドーキンスは「宗教は間違いであり、有害である」と宣言してはばからないが、⑤僕の(注10)スタンスはちょっと違う。たとえ神さまがいないとしても、人間は神さま的な何かを信じるようにできちゃっているので、宗教にはそれなりに価値があると思っている。だから僕は京都じゅうの仏像拝観にせっせと出かけている、ちょっと風がわりな科学者なのである。

15 人間の脳がもたらす疑陽性。ときには人間を助け、ときにはその副作用が人間を翻弄する。これもまた生命現象なのだ。

（伊勢武史『生態学者の目のツケドコロ』ベレ出版　による）

注1　錯視　＝　見まちがい、実際とは異なったように見えること
注2　デメリット　＝　損失になる点、これに対してメリットはデメリットの対義語で得になる点
注3　淘汰　＝　不必要なものや勢力の弱いものがなくなること
注4　鳥獣戯画　＝　ウサギやカエルやサルを人に見立ててかかれた平安時代から鎌倉時代の初めのころの絵巻物
注5　アニミズム　＝　人間以外のものにも魂が宿ると考える信仰
注6　ランダム　＝　不規則、でたらめなこと
注7　翻弄　＝　思いのままに相手をふりまわすこと
注8　お百度参り　＝　神仏に願い事をかなえてもらうために、百回お参りをして祈ること
注9　如実に　＝　実際のそのもののように
注10　スタンス　＝　立場

1　――線①「左側は出っ張っているように、右側はくぼんでいるように見える」とありますが、これはなぜだと説明されていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　人間は三次元の世界で生きているので、円をすべて球として認識するように脳みそがいたずらをするから
イ　人間の脳は、白くなっている部分にふくらみを感じ、黒っぽい部分にくぼみを感じるようにできているから
ウ　光が当たっている部分は白く表現されるので、右側の図は球体に下から光が当たっているように見えるから
エ　左側の図は出っ張っていて、右側の図はくぼんでいると正しく解釈することが人間の役に立つはずだから
オ　光が上から差すという前提で、色の明暗から凹凸を推定して、脳が図を立体として読み取ろうとするから

2　――線②「なんでも擬人化してしまう傾向」とありますが、この傾向はどのような脳のはたらきによるものですか。1～10段落の中から十二字で探し、初めの五字を書きぬきなさい。

3　［　③　］に入る文としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　「一つ目」のバイクに顔を感じることが少ないんだろうか
イ　「二つ目」の存在を顔と見なしてしまうんだろうか
ウ　「二つ目」の車と「一つ目」のバイクでは、擬人化に差があるんだろうか
エ　「二つ目」の車を擬人化するメリットはどこにあるんだろうか
オ　「二つ目」の顔のものに人格を持たせて、擬人化したんだろうか

4　――線④「超自然の存在を介した因果関係」とは、どのようなことを指していますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　神さまによって、自然が破壊（はかい）され、そのことによって人間が被害（ひがい）を受けること
イ　疑陽性によって人格を与えられた自然の起こす災害が、神さまによってしずめられること
ウ　人格を見いだされた何かの力によって、災害が引き起こされたりしずめられたりすること
エ　山や川が神さまによって、人間的な性格を与えられて、怒ったり、なだめられたりすること
オ　自然を超えた人間が、神さまに祈ることによって災害をコントロールしようとすること

5　11段落のハトの話は、どのような意味を持っていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　ハトが身の回りの自然に対して、人格化した神を想定しているということを示す意味
イ　ハトも偶然に起こる二つのことに関係性を見いだし、実際には意味のない行為（こうい）をすることを示す意味
ウ　ハトはエサを食べたい一心で、羽を大きくはばたかせる生態を偶然持つことがあるということを示す意味
エ　ハトも人間と同じく、神さまの存在を信じて儀式を行うことで、エサをもらえると思っていることを示す意味
オ　ハトは他の生物とは違い、人と同じように偶然起こることに関係性を見いだせる生物だということを示す意味

6　――線⑤「僕のスタンスはちょっと違う」とありますが、「僕のスタンス」はどのようなものですか。次の（　　）にあてはまるかたちにして、四十字以内で書きなさい。その際、**「脳」「役に立つ」ということばを必ず用いること。**

（　　）**というスタンス**

（下書き用）

		32			

というスタンス

7　この文章全体に題名をつけるとすると、どのようなものがふさわしいといえますか。次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　人間は顔をどうやって認識するのか
イ　ハトはなぜ大きくはばたくのか
ウ　人間はなぜ神さまを信じるのか
エ　脳のゆがんだ解釈はなぜ起こるのか
オ　人間にとっていかに宗教は害悪か

（問題はこれで終わりです）